様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月　８ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００００９

研究課題名（和文）生命認識における概念の役割と規範--ヘーゲル自然哲学への科学史からのアプローチ

研究課題名（英文）Role of Concept in the Epistemology of Life and Norm. Science-historical approach to Hegel's philosophy of Nature

研究代表者
大河内　泰樹（OKOCHI, TAIJU）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：８０５１３３７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、科学認識論と分析哲学における生命論という二つを踏まえながら、生命は概念の実在であると理解するヘーゲルの生命論の現代的意義を明らかにすることを目指していた。その結果第一に、ヘーゲルの「概念」を生物における規範と理解することによって、従来の規範論的ヘーゲル解釈には欠けていた「正常性」概念を導入することが出来た。第二に、18世紀から19世紀初頭のの生物学史・生理学史を踏まえることによって、ヘーゲルが展開している有機体論の科学史的位置づけを明らかにすることができた。この位置づけから、ヘーゲルが自然科学を積極的に受容しながら、その根本的な批判を試みていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義としては、まず第一に、現代の規範理論に対する一つの貢献をなすことができたという点がある。ヘーゲル哲学を規範理論に応用しようとする理論はすでにBrandomらによって提起されていたが、生物の内に実在する概念というヘーゲルの一見観念論的な主張を再評価することで、生命そのものの理解に新たな観点を付け加えることが出来た。第二に、ヘーゲルの科学批判を浮き彫りにすることができた。特にこの点には、社会的重要性があり、極端な科学主義と狂信的な反科学主義との対立が見られる現代において、科学について哲学的な視点からその意義と限界を明らかにする視点をヘーゲル哲学が持っていることを示すことが出来た。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to clarify the contemporary significance of Hegel's theory of life, which understands that life is the reality of the 'concept', based on the two theories of science epistemology and analytical life theory. As a result, firstly, by understanding Hegel's 'concept' as a norm in living things, I introduced the concept of 'normality', which was lacking in the normative interpretation of Hegel. Secondly, I clarified the position of Hegel's organism theory in the history of science, based on the history of biology and physiology from the 18th century to the beginning of the 19th century. It became clear that Hegel accepted his contemporary natural science while attempting to criticize it radically.

研究分野：哲学

キーワード：ヘーゲル　生命　有機体　科学史　規範　正常性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

1990 年代、米国の分析哲学から起こったヘーゲル・ルネッサンスは、近代形而上学の権化として主として批判の対象となってきたヘーゲル哲学が、現代の規範理論において意義を持つことを明らかにしてきた(Pippin 1989; McDowell 1994; Brandom 1994; 大河内 2017)。しかし、そこでヘーゲルの「自然哲学」が言及されることは皆無であった。同様のことは、シェリングなどドイツ観念論・ドイツ古典哲学再評価の動きについても言える。そこでも、例えばシェリングの神話論が現代分析形而上学と結び付けられ、その積極的な意義が論じられているが(Gabriel 2009)、そこでも自然哲学が顧みられることはなかったといってよい。

こうした自然哲学軽視の背景にあるのは、19 世紀半ば以降の自然科学の急速な発展によって、ドイツ古典哲学の時期に哲学者たちが目にしていた自然科学的な知見の多くが、現在ではすでに否定されており、それゆえにヘーゲルの自然哲学もまた無効になっていると考えられるからである。しかし、こうした見解には３つの問題点がある。1.従来自然哲学とは関係のない「哲学的」な議論として理解され、積極的に評価されてきたヘーゲルの議論（たとえば『精神現象学』知覚章、悟性章、理性章 A「観察する理性」など）の背景には当時の自然科学および自然哲学の知見があるにもかかわらず、それが無視されてきたこと。2.ヘーゲルの自然哲学を評価するにあたって、当時ヘーゲルが触れることの出来た自然科学的知見かがどのようなものであったのかがきちんと踏まえられていないこと、最後に、3.現代生物学においても生命が物理学的・化学的に記述可能であるのかどうかについて統一的な見解が存在するわけではない。還元主義的な自然理解が主流であるとはいえ、そこに生命の独自性が認められるかどうかについては決着がついているわけではないということである、そこにヘーゲルならびにドイツ古典哲学の自然哲学が現代的な意義を持つ可能性があると考えられたのである。

他方で、ヘーゲルの生命概念については現代でも、フランス・科学認識論（エピステモロジー）と分析哲学からの積極的な評価が見られる。ところが、これらの研究がヘーゲル研究にフィードバックされることはほとんどなかったといってよい。ヘーゲル研究では自然哲学研究自体が比較的手薄であり(例外として Kalenberg 2008; Bonsiepen 1997)、科学史研究と結び付けて、ヘーゲル自然哲学の貢献を明らかにしようとする研究はさらに少ない。国内でもヘーゲルの有機体論についての研究はないわけではないが、科学史的背景を無視しているか(野尻 2010)、目を向けていても特定の学説に関心が集まる傾向があった(長島 1990)。例外的に科学史の知見を用いながらヘーゲル自然哲学研究を行っているのが Neuser(1995, 2009)である。しかし、Neuser も含めドイツの自然哲学研究ではフランス・エピステモロジーの科学史研究が全く受容されていないという現状があった。

２．研究の目的

本研究は G.W.F.ヘーゲル（1770-1831）の自然哲学を生命認識における規範の役割という観点から検討し、その現代的な意義を明らかにしようとするものである。研究にあたっては、G.カンギレム(1904-1995)の科学史研究を参照しながら、ヘーゲルの有機体論を生気論の系譜に位置づけ、とくに当時ヘーゲルが触れることの出来た自然科学的知見を踏まえて、ヘーゲルの自然哲学が、どのように当時の自然哲学的知見を再構成しようとしたものであるのかを明らかにしようと試みた。さらに、Thompson (2014)の生命形式概念を参照しながら、ヘーゲルの生命概念を生体における規範の内在性という観点から再評価することを試みた。これによって生命の認識における規範の役割を明らかにすることで、生命における概念の実在性というヘーゲルのテーゼを規範という観点から擁護出来ることを明らかにするとともに、時代的制約にともなうその限界点も明らかにしようとした。

３．研究の方法

上記の目的を達成するため以下の三つの方向からのアプローチを試みた。

第一に中心となるのは、ヘーゲルのテキストの検討である。ヘーゲルが生命ないし有機体を扱っているテキストとして、なかでも『精神現象学』V. 理性章, A. 観察する理性、『大論理学』第三巻「概念論」・第三篇「理念」・第一章「生命」、および『エンチュクロペディ』自然哲学・第三部「有機体の物理学」を中心的に検討した。さらに、2012 年から刊行されつつある決定版全集(GW)第 24 巻の『自然哲学講義』もまた重要な一次文献として検討を行った。

第二に、科学史の参照である。とくにカンギレムの哲学的な科学史研究をふまえながら、ヘーゲルが参照していた生物学/有機体論に関わる当時の文献の検討を行った。特に重視したのは、生物学者ビシャの『生と死の生理学研究』(Bichat 1800)およびトレヴィラヌスの『生物学ないし生ける自然の哲学』(Treviranus 1803) であった。さらに、当時盛んに議論

されていたブラウン説をめぐって、ヘーゲルが参照していたと考えられる、Brown, John, *Elementa Medicinae*, Edinburgh 1784 の翻訳、Brown, John, *Johann Brown's Grundsätze der Arzeneylehre,* aus dem lateinischen übersetzt von M. A. Weikard, Frankfurt am Main, 1795 および John Brown's *System der Heilkunde,* übersetzt von C. H. Pfaff, Kopenhagen, 1798. を検討した。また、このブラウン説をめぐってシェリングに影響を与えた Kielmeyer の著作についても検討した。

第 3 に(3)現代の分析哲学に於ける生命論、とくにトンプソンの「生命形式」の概念を参照しながら、生命を概念と見なすヘーゲルと規範と見なすカンギレムの接合を試みた。

このように、科学史、分析哲学、科学認識論という分野の垣根を越えて、綜合的にヘーゲルの生命概念を再検討するという方法を採用した。

４．研究成果

第一に、ヘーゲルが生命を概念の実在だとしていることについて、1.分析哲学におけるヘーゲルの規範的読解と 2.フランス科学認識論におけるカンギレムの生命概念を参照し、その現代的な意義を明らかにした。その際に、概念を規範として理解する分析プラグマティズムの議論を導入しながら、生命における規範概念にかんして、「義務論的規範」から区別された「正常性の規範」概念を導入することを主張した。これによって、ヘーゲルの有機体論における概念の役割がより明確になり、現代の生命概念をめぐる哲学へのヘーゲル哲学の貢献を明らかにすることができた。

第二に、ヘーゲルと同時代ないしは、それに先立つ 18 世紀の生物学・生理学をめぐる著作を検討することを通じて、ヘーゲルを科学史の文脈に位置づけ、その意義を明らかにした。ヘーゲルは「感受性」「刺激反応性」「再生産」の三つの契機を生命の概念の根本規定としているが、これ自体生命の本質をめぐる当時の科学者たちの議論から採用されたものである。その中でも本研究では、特に「刺激反応性」と「再生産」に着目した。刺激反応性の概念はハラーにおいて提起されていたが、それをブラウンは Erregung という新たな概念の中に取り込み、病理学に応用した。ヘーゲルはシェリング経由でこの議論を受容し、ブラウン・シェリングの量的な病因論に対して、質的な病因論をこれに対置していることを明らかにした。さらに、ヘーゲルにとってそうした病気の概念が、世代の再生産を概念的な発展として説明するのに当たって重要な役割を果たしていることを「正常な異常」という概念を提起することで示した。まさに病気と死は、有機体から精神へ、自然から精神へという決定的なヘーゲル体系の転換点において重要な役割を果たすものであることが明らかになった。

第三に、哲学史の文脈では、感受性、刺激反応性、再生産からなる当時の有機体概念を動力学的力(根源力) 概念からのポテンツ高次化の展開の中で導出しようとしているシェリングの影響を受けながら、ヘーゲルもまた動力学的な物質論自然哲学をはじめながらも、両者の比較検討を通じて、ポテンツ論と弁証法的発展という両者の方法の差異を浮き彫りにすることができた。さらにシェリングに欠けている視点として、ヘーゲルの議論に自然科学的方法論に対する批判が存在していることを示すことが出来た。特に『精神現象学』における「観察する理性」の記述は、従来いわれてきたようにカントの『判断力批判』に対する批判であるのみならず、博物学的な生物学に典型的に見られる実証的な方法にたいする批判を含むものであることを明らかにした。この視点は、体系の一部である論理学と自然哲学にも貫かれており、現代の自然科学やその影響を受けた自然主義哲学批判にも通ずる批判的議論がヘーゲルに一貫してみられることを明らかにすることができた。

本研究ではさらに第四に、以上の文字通りの有機体論を踏まえて、ヘーゲルの有機体的国家論への積極的な解釈を提示するに至った。ヘーゲルは、部分が全体を目的とする形で統合されている組織を有機体として理解しており、その際にヘーゲルが生物に関して見いだしていたのと同様の正常性の概念を、国家にも当てはめていることが明らかになった。さらに、この正常性の概念はヘーゲルが「概念把握」と呼んでいる独自の認識方法と結びついており、有機体理解がヘーゲル哲学の根幹 ともいえる「概念」理解と深く関わることものであるという知見を得ることができた。

第 5 に、2022 年 9 月に京都大学で開催した国際会議「ヘーゲルにおける自然と生命」を開催し、日本、韓国、中国、台湾、香港、ドイツから 15 名の研究者を招いて、上記の研究成果を国際的に発表するとともに、参加者の報告を通じてヘーゲルの生命概念と自然哲学をめぐる最先端の高度な議論の場をつくることができた。そこでは、すでに著名な研究者たちを迎えることが出来たほか、若手の研究者たちの研究交流の場を用意することもでき、今後次世代のヘーゲルないし、ドイツ古典哲学研究の発展につながる貢献をなすことが出来た。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 大河内泰樹	４．巻 1137
２．論文標題 多元的存在論の体系――ノン・スタンダード存在論としてのヘーゲル「エンチュクロペディ」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 思想	６．最初と最後の頁 6-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大河内泰樹	４．巻 12
２．論文標題 生命における概念と規範――観念論の範型としての生命認識――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ハイデガーフォーラム	６．最初と最後の頁 95-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　8件／うち国際学会　10件）

１．発表者名 TAIJU OKOCHI
２．発表標題 Normale Abnormalitaet. Hegels Konzept der Krankheit zum Tod.
３．学会等名 Internationale Tagung. Natur und Leben bei Hegel. Die 4. Tagung des ostasiatischen Hegel-Netzwerks（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 大河内泰樹
２．発表標題 科学史からヘーゲルの体系を見る 有機体論と生理学(あるいは正常な異常について)
３．学会等名 京都哲学会公開講演会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 TAIJU OKOCHI
２．発表標題 Die relationale Ethik Jesu und die Kritik der Gerechtigkeit in Hegels Frankfurter Schriften
３．学会等名 Internationale Tagung. Religionsphilosophie in und nach der Deutschen Klassischen Philosophie（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Taiju Okochi
２．発表標題 Ist Hegel ein Eurozentrist? Ja, aber gut so. Diskussionsrunde: Hegel ein Eurozentrist?
３．学会等名 Internationale Tagung. Das Beste von Hegel.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 TAIJU OKOCHI
２．発表標題 Polizei als Institution der Gouvernementalitaet. Ein ideengeschichtlicher Kontext des Hegelschen Begriffs
３．学会等名 第3回日中哲学会議「ヘーゲルとマルクス」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Taiju Okochi
２．発表標題 Wissen und Handlung. Zwei Formen der Subjektivitaet in Hegels Ideenlehre
３．学会等名 Internationales Netzwerk Hegels Relevanz Tagung 2019: Logik und Moderne Tagung 2019: Hegels Wissenschaft der Logik als Paradigma moderner Subjektivitaet（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Taiju Okochi
２．発表標題 Natur im Begriff. Warum braucht Hegel die Objektivitaet fuer seine subjektive Logik?
３．学会等名 HEIDELBERGER HEGEL-TAGUNG Grundprobleme der Wissenschaft der Logik（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Taiju Okochi
２．発表標題 The Retreat from the Natural. Deficiency of the Contemporary Critical Theory and Judith Butler’s Thesis that Sex is Gender.
３．学会等名 Fakultaet 1, Fach Philosophie, Bergische Universitae;t-Wuppertal（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Taiju Okochi
２．発表標題 Following the Rule Without Interpreting It? Brandom’s Hermeneutic Concept of Social Norms
３．学会等名 The Social Institution of Norms. A Workshop with Robert Brandom, 8. April, 2019, Department of Philosophy, Universitaet Wien,（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Taiju Okochi
２．発表標題 Action and Ethical Life. Second Nature and Hegel’s Radical Revision of Agency
３．学会等名 Internationale Tagung Handlung und Gerechtigkeit in Hegels praktischer Philosophie/Action and Justice in Hegel’s Practical Philosophy（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Taiju Okochi
２．発表標題 Following the Rule Without Interpreting It? Brandom’s Hermeneutic Concept of Social Norms
３．学会等名 The Social Institution of Norms. A Workshop with Robert Brandom（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Klaus Vieweg, Taiju Okochi他22名	４．発行年 2023年
２．出版社 Duncker & Humbold	５．総ページ数 326
３．書名 Das Beste von Hegel-The Best of Hegel	

１．著者名 Folko Zander, Klaus Vieweg, Federica Pitillo, Simone Farinella, Christian Krijnen, Claudia Wirsing, Paul Cobben, Marco Aurelio Werle, Jindrich Karasek, Ermylos Plevrakis, Tomoki Hazama, Taiju Okochi, Vesa Oittinen	４．発行年 2022年
２．出版社 Brill	５．総ページ数 205
３．書名 Logik und Moderne. Hegels Wissenschaft der Logik als Paradigma moderner Subjektivitaet	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Hegel-Forscher Prof. Dr. Taiju Okochi zu Gast
https://www.presse.uni-wuppertal.de/de/medieninformationen/2019/07/03/30060-hegel-forscher-prof-dr-taiju-okochi-zu-gast-an-der-bergischen-uni/
THE DEPARTMENT OF MODERN WESTERN PHILOSOPHY, KYOTO UNIVERSITY
https://modern-phil.bun.kyoto-u.ac.jp/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Internationale Tagung. Natur und Leben bei Hegel. Die 4. Tagung des ostasiatischen Hegel-Netzwerks	2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	イェナ大学	バンベルク大学		
中国	清華大学			
韓国	延世大学	高麗大学		